神戸新聞

深刻さ増す看護師不足

県内離職率13％超す

神戸の病院 過密労働 年間退職者70人

病院の看護師不足が深刻さを増している。背景に夜勤が多いなど厳しい労働環境があり、神戸市の総合病院では昨年春からの1年間に60～70人が離職した。日本看護協会によると兵庫県内の看護師の離職率は13・4％で、全国平均の11％を上回る（2010年度調べ）。労働者の疲労を研究する専門家は「安全性のテストで、夜勤者は酒気帯び運転より危険という結果が出ている」として、医療の安全面で警鐘を鳴らす。

（24面に関連記事）

厚生労働省は昨年6月、看護師らの「雇用の質」の向上に向け、各都道府県知事に協力を要請。文書で「健康で生きがいを持って能力を発揮し続けられる職業となることなくして、持続可能な医療提供体制や医療安全の確保は望めない」として、労働条件の改善などを求めている。

年間に60人を超す看護師が離職した神戸市の総合病院。ここで働く看護師Aさんは在職15年目のベテランで日勤、深夜勤、準夜勤の3交代制で勤務する。深夜勤・準夜勤は合わせて月に12～14回あり、勤務中はほとんど休憩が取れない。

一番きついのは日勤から深夜勤に移る勤務だ＝図。日勤は午後7時に終わるが、5時間半後の午前0時半には次の深夜勤が始まり、朝まで続く。

研修などで休みがつぶれることもしばしば。自由に使える休日は月に3、4日程度だという。離職するのは病院に入って3～5年の看護師が多く、Aさんのようなベテランの負担は重くなる。「家族の支援がないと仕事を続けられない。看護師として働き続けるためには、結婚しても出産はあきらめるしかない」とため息をつく。

看護師の資格を持つ人は増加傾向にある。しかし結婚や育児などを機に退職し、そのまま看護師の仕事から遠ざかる「潜在看護師」が全国で55万人に上る。

財団法人・労働科学研究所慢性疲労研究センター（川崎市）の佐々木司センター長は「酒気帯び運転より安全性に問題があるとされる夜勤勤務で医療事故が少ないのは、看護師が気持ちを張り詰めて仕事に臨んでいるから」とし、8時間勤務の夜勤に2時間の仮眠を取ることを勧める。

その上で「看護師も意識して休むことが必要。あれもこれも取り組んでいては、過労の状態は変わらない」と話している。

（中部　剛、紺野大樹）

■看護師Aさんの勤務の一例

（第３種郵便物認可）

深刻さ増す看護師不足

過酷な夜勤、対策を

病院側、パートで対応も

深刻さを増す看護師不足を受け、病院側は常勤の看護師確保に躍起だ。夜勤手当の増額や奨学金の支給、安価な住宅提供のほか、看護師を連れてきた職員に報奨金を出す病院もあり、あの手この手で人材獲得に努める。

（1面参照）

労働条件の改善を掲げ、署名を集める兵庫県内の公立病院の看護師ら＝神戸市内

病院間の激しい争いは、2006年の診療報酬改定で拍車がかかった。入院患者7人に対し看護師1人を配置する病院に対し、入院基本料が上乗せされることになった。この「7対1基準」によって、看護師確保が病院経営に直結するようになり、看護師の取り合いへとつながった。

神戸市内のある病院では、昨年春からの1年間に32人が退職した。今年4月1日現在、常勤看護師の定数177人に対し、実働143人にとどまっているため、パートタイムの看護師を増やして対応している。

病院側は、新たに看護師を紹介した職員に対し5万円の報奨金を支給するといい、担当者は「他の病院から引き抜くことまでは考えていないものの、どんな手段を使ってでも看護師を増やしたいのが本音」と漏らす。

病院側は数の確保に向けて知恵を絞るが、看護師からは「夜勤の緩和など労働環境が変わらないと、離職問題の根本的な解決にならない」との声が上がる。

（中部　剛、紺野大樹）